慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近代黎明期の日常的世界を映す万華鏡 : G.Chr.リヒテンベルクが編集した啓蒙的情報誌としての『ゲッティンゲン懐中暦』
Sub Title	Ein Kaleidoskop zur Erfahrung des Alltags. Der Goettinger Taschen Calender als aufklärerisches Informationsblatt, den G.Chr.Lichtenberg für das gemeine Volk herausgab.
Author	坪井, 靖子(Tsuboi, Yasuko)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2013
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.30 (2013. 3) ,p.244- 275
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20130331-0244

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代黎明期の日常的世界を映す万華鏡

G.Chr.リヒテンベルクが編集した啓蒙的情報誌としての『ゲッティンゲン懐中暦』

坪井靖子

0. はじめに

ゲオルグ・クリストフ・リヒテンベルク（G.Chr. Lichtenberg, 1742-1799）は、ドイツ後期啓蒙時代に、実験物理学者、天文学者、アフォリズム作家、教養雑誌・懐中暦の編集者、諷刺家、俳優批評家としてあるいはまた線画を得意とするなど、多彩な才能を発揮して、開明的な大学の町、ゲッティンゲンで活躍した。そしてそれぞれの分野で特異な足跡を残している。彼が当時、非常にすぐれた実験物理学者、自然研究者として国の内外にその名を知られていたことは、彼がまず31歳（1774）でゲッティンゲンの王立科学アカデミー（数学部門）に準会員として指名されたことを始めとして、その後36歳（1779）のときに同アカデミー正会員に、39歳（1782）のときにダンツィッヒ博物学協会およびハレ博物学協会の会員に指名され、その後ロンドン王立協会（50歳－1793）、イェーナ物理学協会（51歳－1794）、ペータースブルク科学アカデミー（52歳－1795）、エアフルト数学物理学協会（53歳－1795）、イェーナ鉱物学協会の名誉会員（55歳－1798）、ハーレム（オランダ）科学協会（55歳－1798）の会員に指名されていることからも推察できる。[1] 18世紀にはヨーロッパ各地に、アカデミーや科学協会が設立され、伝統的な大学や教会、修道院に代わって、これらが知的活動の中枢となっていた。彼のゴトマール通りの自宅にしつらえられた狭い講義室には、隣接の部屋や階段室まで学生や聴講者が溢れ

1) Promies, Wolfgang: *Georg Christoph Lichtenberg Schriften und Briefe IV*, S.1329-1334 および Lichtenberg-Gesellschaft e.V.HP, G.C.Lichtenberg >Leben 参照。

たという。当時のドイツ国内外の学識者の多くは、リヒテンベルクの講義を一度は聴講したいと考えゲッティンゲンに詣でた。実験物理学は、当時、新しい時代を先導する学問であった。しかし、彼には同時に、すぐれた文学的素養があった。それが彼を知的雑誌や暦の編集などの仕事にも向かわせたのである。

本稿で取り上げている *Goettinger Taschen Calender*（『ゲッティンゲン懐中暦』、'GTC' とも表記する）が、1999 年のリヒテンベルクの没後 200 年を記念して翻刻された。リヒテンベルクの編集した全 22 冊のうちの 9 冊[2] だけではあるが、*Taschenbuch zum Nutzen und Vergnügen fürs Jahr ... von Georg Christoph Lichtenberg nebst Goettinger Taschen Calender vom Jahr ...* という表題で、2000 年を前後してマインツの Dieterich' sche Verlagsbuchhandlung から翻刻出版された。ゲッティンゲンの大学図書館 Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek や、彼の生地、ダルムシュタット近郊のオーバーラムシュタットの郷土史博物館 Heimatmuseum Ober-Ramstadt などには、彼が編集にたずさわる前の 2 年分（1776 年版および 1777 年版）と、彼の死後 1813 年まで継続されて発行された 14 年分を含め、38 年分が、原書あるいは他に散在する原書の復刻版と共に（あるいは部分的に）所蔵されている。暦とは、本来該当する年が過ぎてしまえばその役割を終え、破り去られてしまう性質のものである。それゆえ、既に 200 年余も前に、ヨハン・ベックマン（Johann Beckman, 1739-1811）は彼の文化史的叢書 *Beiträge zur Geschichte der Erfindungen* (1780-1805)[3] において、カレンダーの歴史を紐解くにあたって、古いカレンダーが手に入りにくい、と嘆いているが、現在に至ってはなおさらなことである。15，6 世紀より暦には、占星術や瀉血についての情報が含まれていたが、18 世紀半ばに、不合理な迷信に関わるものを暦から一掃するという行政の方針によって、古い暦は破棄されてきたことにも起因していた。こうして『ゲッティンゲン懐中暦』が残され伝えられているのには、それなりの理由があ

---

2) 1778、1779、1781、1782、1785、1786、1794、1797、1799 各年版。

3) 邦訳名：『西洋事物起原』特許庁内技術史研究会訳、ダイヤモンド社、1982 年。

るのである。

リヒテンベルクは、この暦の編集を発行人ディートリヒ（Johann Christian Dieterich, 1722-1800）から勧められ、1777 年、前任者エアクスレーベン（Johann Christian Polycarp Erxleben, 1744-1777）から引き継いだ。リヒテンベルクは生来の病弱な体を押して、多忙な大学での実験物理学の講義や執筆の仕事の傍ら、22 年間正に亡くなる直前まで休むことなく、この請け負った仕事、暦の編集に精力を注いだ。秀でた理解力と表現力をもって、得意とする分野の、当時最新の科学・技術に関する信頼の置ける知識や情報を一般庶民に分かりやすく提供し、あるいは社会批判や人間の表情を表す銅版画を熱心に解説した。　対象の読者は、一般庶民とは言え、学識者や当時新しい読者層を形成した中間層の人々、大商人やその家族の婦人たちであり、いわゆる知的エリートであった。彼らの知的欲求と好奇心に応え、話題を提供すると共に、彼らの自立的思考を促そうという、当時のドイツの学識者が一般にそうであったように、リヒテンベルクの啓蒙的精神が、彼をこの仕事に駆り立てたようである。一方この暦の編集は、リヒテンベルクにとって一般の人々に近づく機会でもあり、また、彼自身の考えの発表の場でもあった。ちなみに、リヒテンベルクは、カントへ『懐中暦』を贈呈する折、書き添えた手紙（1791 年 10 月 30 日付）の中で、「この雑誌（懐中暦を指す）の編集を私は、我が家の家賃の支払いのために休まず続けているのです。」などと書いている[4)]。確かに当時、大学教授の収入は家計をまかなうのに十分ではなかったのだが、こうして庶民のための啓蒙的出版活動をしていることをリヒテンベルクは控え目に、カントに伝えているようだ。カントの有名な『啓蒙とは何か』は、このときよりすでに 10 年前に出版されている。リヒテンベルクは学生時代より、カントの熱烈な読者であった。

---

4) リヒテンベルクは、2 度目のイギリス旅行から帰国の後、終生、『ゲッティンゲン懐中暦』の発行人でもあったディートリヒ所有のゴトマール通り 1 番地のビルの中のアパートに家族と共に住んだ。この建物は今（2012 年）も同じ場所に現存する。

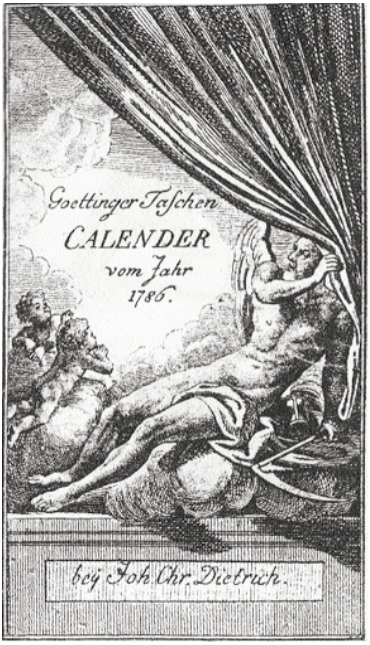

図１：Der Deckel von GTC 1786

この手の平サイズ[5]の小さな年鑑ともいえる暦から、当時のヨーロッパに広まった啓蒙運動の潮流の中で、好奇心豊かな知的な庶民の要求に応えていかに熱心に新しい情報や知識が提供されたかを、窺い知ることができる。1786 版の『ゲッティンゲン懐中暦』の表紙絵には、翼らしいものを背中につけた男の人が、右手でカーテンを大きく開いている姿が描かれている。カーテンの向こうには、雲間から明るい光が差し込んでいる。その光の中に、「1786 年版ゲッティンゲン懐中暦」という文字が浮き上がって見える。それは、この暦こそ読者のみなさまに啓蒙の光をお届けするのです、と宣言しているようである。そして、男の人の左手に握られた鎌は、ここから刈り取られるべき豊かな実りを保証している。（図１参照）　なお、『ゲッティンゲン懐中暦』の表紙絵にはこの他、対象とする読者層を暗示する図もある。この暦の中で取り上げられている‘最新の発見’、‘最新の発明’あるいは‘物理学的に奇異なこと、不可思議なこと’は、現代のわれわれには、特に科学技術の分野においてとうに周知の事柄であったり、古びて消え去ってしまったりした事柄ではあるが、当然ながら当時としては最先端の学問的知識であり技術であったのであり、そこには当時の人々のすぐれた洞察力と実行力が垣間見られる。

本稿では、まず、リヒテンベルクの生きた時代と彼の人生の転機となったイギリス旅行を概観する。イギリス旅行に言及するのは、この旅行で得

5) ヘッセン州立ヴィースバーデン図書館所蔵の 1778 年版によると 6.0 × 10.2 cm。

た経験が、リヒテンベルクが後に暦の仕事を引き受ける動機に部分的に繋がっていると思われるからである。その後、本稿の主題として、彼の編集した22冊の『ゲッティンゲン懐中暦』の各版の後半部を構成する、『役立つ楽しい懐中文庫 *Taschenbuch zum Nutzen und Vergnügen*』に注目し、その中の記事を考察することによって、この暦に映し出されている思潮、そして、この暦にリヒテンベルクのいかなる精神が反映されているかを検証しようとするものである。

1.‘中世から近代へのはざ間期’に生きたリヒテンベルクと彼のイギリス旅行

1742年に誕生し1799年に没したリヒテンベルクは、18世紀後半のドイツ社会に生き、19世紀を見ずに没した。この時代はドイツ後期啓蒙時代と区分される。ドイツの歴史家ボーズルは、「中世」と「近代」の境目を1750年前後と見、コゼレックは、1750年前後の時期を中世から近代へ移行する「はざ間期」Sattelzeit[6]と呼んだ。この時期は、物事の概念や価値観、また、知覚の仕方や行動のとり方が大きく変化した時代であった。ボーズルやコゼレックによれば、リヒテンベルクは、正に中世と近代の境目の時期の社会を目撃したことになる。そして、この時期に発行された彼の暦には、その社会が投影されているに違いない。

18世紀の作家や読者には、前時代までの軽信さが依然強く残っていた。啓蒙主義者たちによって、信仰はその基盤を揺さぶられたが、迷信は依然強く残っており、悪魔の存在が疑われることはなかった。しかし、古来より存在した聖書の記述に基づく‘博物学’と自然学は、18世紀後半に、イギリスのロック（John Locke, 1632-1704）の経験論哲学やフランスのビュフォン（Georges-Louis Leclerc; Comte de Buffon, 1707-1788）やスイスのドリュック（Jean-André Deluc, 1727-1817）の観察と実験を基盤とする実験

---

6) ‘馬の鞍の時代’の意。馬の鞍は、馬の背を分ける分け目に位置し、跨る部分が平らであることから、過渡期の象徴として用いられた。Brunner, Otto&Conze, Werner&Koselleck, Reinhard. *Geschichtliche Grundbegriffe*. Stuttgart: Ernst Klett Verlag, 1972-92, p.XV 参照。

科学によって、その本質が大きく変えられた。つまり、自然研究の方法が、推論から経験・観察・実験に転換したのである。聖書の記述と、事実と観察による実験科学とが一致しないことで、科学は神学や古来の神学の専制主義に戦いを挑んできたが、結局人々は、“両者が異なった次元にあって、永遠に切り離されている平行な平面に展開する真理である”という解釈に至り、科学は、自由を獲得したのだった[7)]。そして、18 世紀後半迷信や軽信が実証的科学によって、次第に排除されていくのである。開明的な家庭環境や教育の中で培われたリヒテンベルクの心の内には、この 18 世紀後半の新しい精神が漲っていた。つまり、リヒテンベルクは経験と観察と実験こそ、科学の基盤であると認識していた。ガーマウフ（Gottlieb Gamauf）は、“Erfahrung, Beobachtung, Versuche”というリヒテンベルクの講義の記録を伝えている[8)]。

ゲッティンゲン大学で勉学を終了した後、リヒテンベルクは、2 度イギリスへ旅している。1 度目は 1770 年 3 月下旬から 5 月中旬まで、ゲッティンゲン大学に留学していたイギリスの貴族の子弟たちを故国に送り届けるための、仕事上の短い旅行であった。リヒテンベルクは貴族の留学生の世話をしていたのだったが、そのうちの一人、イルビイ（William Henry Irby）の父親であるボストン卿（Lord William Boston, 1707-1775）の暖かい配慮によって、ロンドンに滞在中、英国王ゲオルグ 3 世とリッチモンド天文台で親しく語り合うという僥倖にめぐりあった。ゲオルグ 3 世は、ハノーファー家がイギリス国王を兼ねることになって 3 世代目の王であり、祖先の国ドイツの優秀さを認めていた。帰国後、1772 年から 1773 年まで、リヒテンベルクは王より委託された事業として、Hannover, Osnerbrück, Stade の町の天文学的測量に従事している。

2 度目のイギリス旅行は、1774 年 8 月から 1775 年 12 月まで、自ら休暇を申請しての旅行であった。イギリス行きを決心したことについて、前年

---

7) ダニエル・モルネ著『十八世紀フランス思想』p.114 参照。

8) Fritz Krafft: *Georg Christoph Lichtenberg Physik-Vorlesung/Nach J.Chr.P.Erxlebens Anfangsgründen der Naturlehre/Aus den Erinnerungen von Gottlieb Camauf*, marixverlag,Wiesbaden 2007, p.11 参照。

の 11 月 2 日付けの手紙で、測量のために滞在していたシュターデから親しい友人ディートリヒ[9] に次のように書きおくっている。

「…　私はこれまで非常な激務に耐えてきました。おまけにひどい歯痛にも悩まされ、すっかり痩せこけてしまいましたから、あなたには私がほとんど分からないでしょう。それで私は決心して、英国に行くことにしました。復活祭をロンドンで祝うことになると思います。そして、私一人になれるように *ganz für sich* と考えています　…[10]」

ボストン卿が長期滞在に招いてくれていた。イギリス滞在中、リヒテンベルクは国王一家のキュウ Kew にある居城に何度となく招かれて滞在した。国王、王妃から、‘臣下’としてではなく、‘客人’として温かく迎えられ、親しく語り合ったと彼は友人宛の手紙に記している。ゲオルグ 3 世が、特に天文学に関心を持っていたことから、国王夫妻は祖国ドイツの名声を博する開明的な大学からきた、自分たちとほぼ同年代の若い学者、リヒテンベルクの天文学を始めとする該博な知識と人間性に感銘を受けていたと想像できる。後に、王の推薦により、彼にゲッティンゲン大学の教授への道が開かれた。

リヒテンベルクが 2 度目に訪れた、1774 年ごろイギリスは、産業革命に突入していた。1775 年、リヒテンベルクはバーミンガムやバースを訪れて、印刷工場や製造工場、いわゆるマニュファクチャーを見学している。そして、分業による合理的な作業の進め方、火力や蒸気を動力とする新型の機械など、最新の技術 Technologie に感心している。また、ボストン卿の配慮で、議会も見学し、議会制と民主主義の先進国の有様に目を見張っている。それは、故国の同胞たちがまだほとんど誰も体験していない、最新の情報であった。

こうしてリヒテンベルクの、政治・文化・産業の面での先進国イギリス

---

9) 家主でもあり後の『ゲッティンゲン懐中暦』の発行人で、リヒテンベルクの終生の友人。

10) Vgl. Promies: *Schriften und Briefe IV*, S.187.

への旅行は、人々との交流に振り回されるきらいもあって“ganz für sich”とはならなかったが、多くの学識者、著名人と知り合い、彼の人格形成や、将来の職歴にとって重要な人々との出会いに導かれた教養旅行 Bildungsreise となった。彼が英国旅行中に彼の大学の教授や友人知人、そして兄弟に熱心に書き送った手紙、そして日記や旅の備忘録 Reiseanmerkungen[11] には、彼の経験や印象が平易な文章で、また詳細に綴られている。当時特に書き手本人が言及しないかぎり、手紙は情報伝達の手段として、親しい仲間と共有されるのが普通であったから、リヒテンベルクもイギリスからの手紙をそれを意識して書いていた。人々は彼の経験や見聞した産業、技術、文化の最先端を行くイギリスの現状を詳細に伝える手紙を食い入るように読み、あるいはその朗読に熱心に耳を傾けたに違いない。

ところで、見聞した事を詳細に説明し報告するリヒテンベルクの手紙の書き方には、実は帰国後間もなく彼が執筆することになる、『ゲッティンゲン懐中暦』の記事の書き方に共通するものがあるのである。つまり、見聞した最新の情報や知識を、他の人々と分かち合おうとする、彼の啓蒙的姿勢と共に、彼のすぐれた観察眼を通しての情報収集の能力、それを解析し理解する能力、そしてそれを平易に、あるいは彼特有の軽妙な風刺をこめて表現する能力が認められるのである。情報盛り沢山の彼の手紙は、それゆえ概してみな長い報告書のようである。

上記の傾向が見て取れる一例として、リヒテンベルクの友人であり家主であり、『ゲッティンゲン懐中暦』の出版人であるディートリヒに宛てられた、1770 年 4 月 19 日付ロンドンよりの手紙の一部（A）と、1779 年版の『懐中文庫』に見られる小さな記事（B）とを、次に対照して掲げてみよう。どちらもテーマは、イギリスの食事についてである。

（A）「…英国人の食事は、簡素だといわれていますが、まさにその通りです。いろいろな料理を取り合わせることが少ないのです。しかしそうは言っても、彼らの単独の料理の量といったら並大抵ではありませんから、料理を取り合わせるということは愚かなことでしょう。

11) これらは、プロミース（Wolfgang Promies）著の叢書 *Schriften und Briefe* にまとめられている。

ワインにおいて、彼らには際限がありません。一日の初めの食事は昼にとり、食後にはワインを飲みます、2 種類の全く違うものを。ワインを飲む時間になると、婦人たちは席をはずします。これにはさまざまな理由があるのですが、なによりもまず、婦人たちが男性たちから国家機密を盗み聞きしないためです。2 番目には、彼女たちも秘密を盗み聞きさせないためです。食後のお茶にはまた皆がそろうのですが、これはあまり長い時間ではないので、両者ともどうやらうまく秘密を守り通すのです。…

(B)「イギリスにおける、食事時間のずれについて。」

「…ハインリッヒ 8 世の時代、イギリスでは、朝 10 時に昼食がとられ、午後 4 時に夜の食事がとられていた。現在はしばしば、午後 5 時に昼食がとられ、夕食をとるのは夜 11 時、あるいは 12 時にすらなる。昼食が遅いため、今では多くの人が夜の食事をとらないのである。だがその代わり、朝 10 時にしっかりとした朝食を食べるのである。それゆえ、(従来の) 循環はほとんど終わっている。つまり、晩餐が正餐に移り変わってきて、中間の食事としての姿を呈している、それは、従来の意図を借りつつ、現状の時間を借りているのである。」(1779 年版『懐中文庫』、68 頁。"*Fortrücken der Essenszeit in England*")

優れた天文学の知識と共に、上記のような能力を持つリヒテンベルクが、暦の編集者にはうってつけの人材であることを、この暦の発行人ディートリヒは見抜いていたに違いない。こうして、本来一つの町の暦であった『ゲッティンゲン懐中暦』は、リヒテンベルクの特異な能力により、庶民の啓蒙に資する、知性と娯楽を兼ね備えた、現代われわれが知るような情報誌としてのより普遍的な性格を与えられた。

2.『ゲッティンゲン懐中暦』の近代性と特異性

リヒテンベルクが編集した全 22 冊 (1778 年版から 1799 年版まで) の『ゲッティンゲン懐中暦』は、毎年変わらず、前半が暦、後半は『役立つ楽しい懐中文庫 *Taschenbuch zum Nutzen und Vergnügen*』という中表紙 (図 2 参照) が挿入された読み物部との 2 部構成であった。これは、ドイツあるいはヨーロッパに普及した年鑑型の暦の伝統的な様式を踏襲したもので

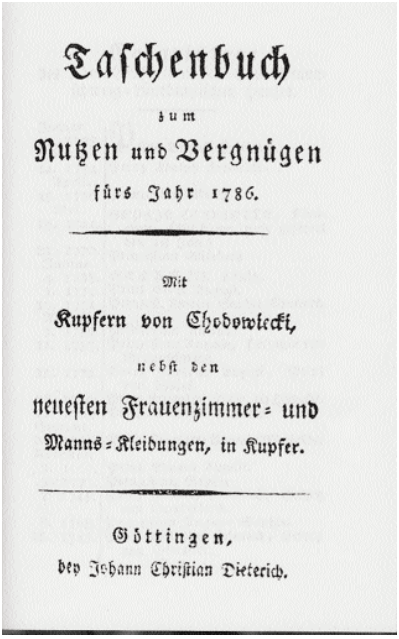
Taſchenbuch
zum
Nutzen und Vergnügen
fürs Jahr 1786.
Mit
Kupfern von Chodowiecki,
nebſt den
neueſten Frauenzimmer- und
Manns-Kleidungen, in Kupfer.
Göttingen,
bey Johann Chriſtian Dieterich.

図２： Das Titelblatt vom Taschen- buch 1786.

ある。後半の読み物部には、さまざまな分野の新情報や知識の提供、あるいは、論説、銅版画の解説、逸話など種類・内容とも非常に多彩な記事が盛り込まれている。

暦の部は、ドイツあるいはヨーロッパの暦の伝統的様式に沿った内容であるが、この暦の部は、該当の年が、さまざまな暦の起源、あるいは歴史的事象の起こった年から何年目に当たるかを示した一覧表、「年代計算」から始まり、キリスト教の祝祭日、四季のこと、太陽や惑星、日食月食など天体の動向についての詳細な記述に続いて、当時ドイツやヨーロッパで使用されていた、何種類かの暦が比較されている 12 ヵ月の暦日表（カレンダー）が続く。これらは、教会の祝祭日を知り、時期にかなって農作業を行うべく季節の変化を予想するために、人々の日常生活にとって重要な情報であった。特に『ゲッティンゲン懐中暦』においては、天体の動きに関する記述が非常に科学的で詳細である。確かに、リヒテンベルクの天文学者ならではの専門的知識に裏打ちされていた。また、瀉血や占星術は、18 世紀の暦から完全に消えているのだが、かつてこれらに用いられた黄道十二宮など天体についての情報は、ここにも依然として掲載されていた。これらは、自然科学的情報として季節の変化を知る上で欠かせないものではあったが、恐らく開明的であるはずの人々の意識の中にも、占星術への関心や興味が旧来の習慣として依然残っていたことを物語っているのではないかと思われる。

また、暦の部の最後に（1787 年版からは、後半の読み物部の冒頭に）、英国国王ならびにブラウンシュヴァイク－リューネブルク選帝侯家の人々

の誕生日一覧表[12]と共に、当時存命中のヨーロッパの国々の王家とその系譜にある人々の地位や誕生日などが克明に記されている系譜年鑑[13]ともいうべきページがある。これにはこの小さな暦の総ページ数に比して非常に多くのページが割かれているのである[14]。啓蒙の時代といわれる18世紀ヨーロッパの人々（特に君主や貴族）は、ヨーロッパを「コスモス」、つまり全体的連関を持った世界と理解していた[15]。各国の王家の間では政治的な意図で政略結婚が盛んに行われ、君主たちは、互いに何らかの血の繋がりを持っていた。また、貴族たちも国際的で、コスモポリタンであった。それ故、ゲッティンゲンという小さな大学町の一般庶民にとっても、この状況を恐らく話題として把握しておくことが重要であったと思われる。

さて、『懐中暦』の後半部、『役立つ楽しい懐中文庫』には、文字通り、庶民の日常の生活に‘役立つ’知識と情報、そして‘楽しい’読み物が、掲載されていた。‘役立つ’情報や知識としては、自国と近隣の国々の度量衡（液体、穀物、その他の物体の計量単位、距離の単位）の対照表や貨幣の比較、ヨーロッパ各都市の経度と緯度などが、毎号ほぼ同じ順序と体裁で掲載されていた。この時代、これらの知識はこの暦が対象とした読者の中の、とりわけ大商人たちの経済活動にとって必需の情報であったに違いない。

18世紀の90年代になって、ドイツ、あるいはヨーロッパにおける暦の後半部を構成するようになったといわれる暦物語は、研究分野では「教訓

---

12) *Geburthstage des Königl. Großbritannischen und Braunschweig=Lüneburgischen Hauses.*

13) *Genealogisches Verzeichniß der vornehmsten jetztlebenden hohen Personen in Europa.*

14) 割かれているページ数は次のとおり。1778:88頁（Editorische Notizを参照）、1779:72頁、以下同様に1780:70, 1781:?, 1782:70, 1783:?, 1784:75, 1785:?, 1786:77頁（ENを参照）, 1787:77, 1788:77, 1789:77, 1790:77, 1791:77, 1792:77, 1793:75, 1794:77（ENを参照）, 1795:75, 1796:79, 1797:79, 1798:79, 1799:?.

15) イム・ホーフ Ulrich Im Hof　『啓蒙のヨーロッパ』*Das Europa der Aufklärung* 成瀬治訳、平凡社1998年、127頁参照。

的・道徳的傾向を持った大衆向けの物語」と位置づけられている。19 世紀初頭、ヨーハン・ペーター・ヘーベル（Johann Peter Hebel, 1760-1826）の編集した、*Der Rheinländische Hausfreund*（『ライン地方の家の友』）の優れた物語の手法によって、暦の中の読み物は、「暦話」（Kalendergeschichten）として、一つの文学的ジャンルにひきあげられたことはよく知られているが、ヘーベルの暦の表題の中にも、“… mit lehrreichen Nachrichten und lustigen Erzählungen”という表現がみられ、ほとんどすべての話が教訓的な言葉で締めくくられているように、旧来の暦の伝統上にあるのである。ヘーベルの暦も含めて、旧来の暦物語とリヒテンベルクのいわゆる暦物語としての位置を占める『役立つ楽しい懐中文庫』との大きな相違点が、正にこの点に見られるのであり、「教訓的・道徳的傾向」は『役立つ楽しい懐中文庫』にはほとんど見られないといえるのである。

ドイツの（あるいはヨーロッパの）暦の後半部を構成する読み物部の変遷の概略を紐解くと、16 世紀初頭に起こり 17 世紀にはヨーロッパ中に普及した‘プラクティカ’Bauern-Praktik（農事暦・百姓暦）が、既に 16 世紀中ごろに暦と組み合わされるようになっていた。占星術や瀉血のための情報は、暦に付随して載せられていたが、プラクティカには、農作業にとって重要な、四季、あるいは 12 ヶ月における気象状況の予想が含まれていた。17 世紀にプラクティカにおいて、物語的要素が加わるようになった。18 世紀には、暦自体に、そしてプラクティカに、あるいは、独立した第 3 番目の部分として、「役立つ読みもの」と表題が付けられて、物語風というよりは、史実として裏づけされた出来事を伝えるという意味での歴史物語 Geschichtserzälung が掲載された。この、‘伝える’、あるいは‘物語る’部分‘das erzählende Inhalt’は、しばしば‘珍しい、不可思議な現象’Merkwürdigkeiten と題されて、神による「不思議の表れ」として、道徳的な教訓を含むことが多かったが、18 世紀に至って、‘珍しい、不可思議な現象’、つまり世界中の不気味な話、殺人や災難、異常な自然現象や珍しい出来事など、現実に起こった話が次第に優先されるようになり、信頼の置ける報告への要求が高まっていった[16)]。

リヒテンベルクの‘Merkwürdigkeiten’という語を題名に含む記事においては、決まって「物理的な、およびその他の不可思議な、珍しい現象」

‘physikalische und andere Merkwürdigkeiten’ となっており、そしてその直前に置かれた、‘Neue Erfindung’ または ‘Neue Entdeckung’ と組み合わされて、物理学的あるいは博物学的に、あるいはその他の珍しい現象や事柄の最新の発見（後に、‘最新の発明’ も加わる）として取り上げられているのである。すなわち、主に、自然科学的見地から珍しい事象が報告され、あるいはその新知識が一般の人に分かり易く提供されている。そして彼の暦の場合、こうした読み物が他の暦に先んじて、既に 1778 年から掲載されているのである。

3.『懐中文庫』の記事の多彩さ

ここでは、リヒテンベルクによる『ゲッティンゲン懐中暦』の読み物部、『役立つ楽しい懐中文庫』に掲載されている記事に焦点を当て、その傾向や特質を考察するとともに、そこに編集者リヒテンベルクのいかなる精神や思想が反映されているかを探求する。なお、本考察は、リヒテンベルクの編集した全 22 冊のうち、翻刻された 9 冊 [17] と、翻刻されていない残りの 13 冊 [18] は、ゲッティンゲン大学図書館（(Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen）所蔵の復刻版（Faksimileausgabe）により行った。

全 22 冊の『役立つ楽しい懐中文庫』の部には、総計 340 の、長短さまざまな記事が掲載されている。大半はリヒテンベルク自身によって書かれたものであるが、国内外の学会誌、報告書、雑誌などからの引用もしばしば見受けられ、その出典 [19] はその都度文中に明記されている。話題は多岐にわたり、分野はさまざまで、また内容も論文、教養的知識や時事的情報、逸話、あるいは銅版画の解説など非常に多彩である。リヒテンベルク

---

16) Jan Knopf, “Kalender”, in *Von Almanach bis Zeitung —Ein Handbuch der Medien in Deutschland 1700–1800*, Fischer/Haefs/Mix (Hrsg.), München: C.H.Beck, pp.121-136 参照。

17) 1778, 1779, 1781, 1782, 1785, 1786, 1794, 1797, 1799 の各年版。

18) 1780,1783,1784,1787,1788,1789,1790,1791,1792,1793,1795,1796,1798 の各年版。

19) 出典の例： Grens Journal der Physik (後の Annalen der Physik), Transaktionen der Königl. Societät London, Pariser Memorie, Gentleman’s Magazin, Göttingenisches Magazin 等。

の編集のすぐれた技量と並々ならぬ努力が窺われる。その多彩さを示す例として、彼の第一作目の 1778 年版『役立つ楽しい懐中文庫』の目次を次に掲げる。〔 〕内にその記事のキーワードを入れたが、これらは筆者の分類作業の基盤となっている。（ドイツ文の表記は原文のまま。文末の数字はページを示す。）

Ueber Physio(g)nomik. 1
（観相学について）　〔小論〕

Einiges zur Erklärung der Kupferstiche. 24
（銅版画の解説）　〔銅版画の解説〕

Zubereitung des Eises in Indien. 31
（インドにおける氷の製法）　〔ヨーロッパ以外の土地や国への関心〕

Vom Dsiggetéi. 35
（ジゲタイ[20] について）　〔ヨーロッパ以外の土地や国への関心および博物学的関心〕

Physiologie des Laufes menschlichen Lebens. 38
（人間の生命運動の生理学）　〔自然科学的関心〕

Besondere Achtung einiger Völker gegen die Damen. 44
（いくつかの民族が女性に払う特別な配慮）　〔女性〕

Neue Erfindungen und physikalische Merkwürdigkeiten. 46
（最新の発明と物理学的珍現象）　〔自然科学的関心〕

Künsteleyen der Menschen an Bildung ihres Körpers. 59
（人が体にほどこす不自然なこと）　〔自然科学的関心〕

Englische Moden. 66
（英国風ファッション）　〔女性〕

Art der Chineser, Perlen zu machen. 70
（中国人の真珠製造法）　〔ヨーロッパ以外の国や土地への関心および博物学的関心〕

---

20) Dschiggetai: Kulan に同じ。ヒマラヤの北方の大草原に生息する雑種ロバ.（Meyers Grosses Handlexikon より）

Neueste sichere Volksmenge von den brittischen Colonien in Nordamerika. 71
（北米の英国人居住地に住む人の最新の数）　〔社会学的関心〕
Neueste Handelsbilanz zwischen Grosbritannien und Nordamerika. 72
（大英帝国と北アメリカの間の最新収支）　〔社会学的関心〕
Anekdoten. 73
（逸話･笑い話）　〔逸話〕
Proben sonderbarer Verschwendung aus den Ritterzeiten. 75
（騎士時代に行われた異常な無駄遣いの検証）　〔社会学的関心〕
Der vollkommenste Wegmesser (Hodometer.) 76
（完璧な距離測定器（測歩計））　〔自然科学・技術への関心―道具〕
Eine astronomische Betrachtung bey diesem Hodometer. 81
（測歩計を用いる際の天文学的観測）　〔自然科学・技術への関心―道具〕
Würkung der Musik auf einige Thiere. 82
（何種かの動物に表れた音楽の効果）　〔博物学的関心〕
Vergleichung der St.Peters Kirche in Rom mit der St.Pauls Kirche in London, und beyder mit dem Weltgebäude. 85
（ローマの聖ペテロ教会とロンドンの聖パウロ教会の比較および両者と宇宙との対比）　〔社会学的・自然科学的関心〕
Nachricht von Capitain Cook's dritter Reise. 90
（キャプテン・クック 3 度目の大航海の報告）　〔報告・時事〕

3.1 『懐中暦』の特徴的な傾向の分析

これらの記事を一概に性格づけることは容易ではないが,『ゲッティンゲン懐中暦』の特徴や傾向を知る手段としてまず、記事が（A）事実として確認できる内容のものであるか、（B）事実として確認できない内容のものであるか、を根拠とする２つのグループを設定した。更に（A）を、1. 自然的事象に関する記事、2. 社会的事象に関する記事、の２つのグループに、また（B）を、1. 精神的分野（信仰・道徳）に関する記事、2. 創作、の 2 つのグループに大別した。そしてすべての記事をテーマ別に分類した上で、（A）の２つと（B）の２つのグループにそれぞれ区分けした。カッ

コ内の数字は、そのグループに含まれる記事の数を示す。この数字を指針として、この『懐中文庫』の、延いてはリヒテンベルクの『ゲッティンゲン懐中暦』の傾向と特徴を推論するものである。また、それぞれのグループに特徴的と思われる記事の中からいくつかの例を挙げ考察する。

グループ一覧：

A. 事実が確認できるもの：

1. 自然的事象に関する記事：
   1）自然科学・技術の知識（情報）の提供 （119）
   2）動物、その他の生物・博物学的関心事 （18）
2. 社会的事象に関する記事:
   1）社会学的、経済学的知識（情報）・知見 の提供 （54）
   2）ヨーロッパ以外の土地や国について （13）
   3）ニュース・時事 （4）
   4）婦人・ファッションおよび 料理・家政・生活（庭、音楽関係、なぞなぞを含む） （30）
   5）逸話・奇談 （34）

B. 事実が確認できないもの：

1. 精神的分野（信仰・道徳）に関する記事:
   1）‘合理的’思考の提示・論説 （22）
2. 創作
   1）銅版画の解説 （41）
   2）文芸 （5）

（読み物としての記事の総計： 340　なお、副題の記事も加算した。）

3.2 各グループの特性

上記の分類方法に従って分類された記事について考察する。

3.2.1 A.1. 自然的事象に関する記事

1）自然科学・技術の知識（情報）の提供。—キーワードは ‘physikalisch’ と ‘merkwürdig’

このグループは、リヒテンベルクの専門分野に関わることから、対象となる記事の数は非常に多く、おおよそ全体の 3 割強を占めている。取り上

げられているテーマには、天体とその仕組み、人体、植物、漁業、鯨蝋工場、中毒の治療法、新種の病気、雷、電気、火山、気象、物理的化学的現象、地質、画法、染料などで、リヒテンベルクらしいヴィッツを含んだ‘接吻の力学’（1799/212）や‘野辺の幽霊についての新しい話’（1779/81）という風変わりなタイトルも見られる。このグループの中でとりわけ特徴的であるのは、“Neue Erfindungen (Neue Entdeckungen), physikalische und andere Merkwürdigkeiten”（新発明（あるいは新発見）と物理学的、その他の珍現象）というタイトルの記事が、ほとんど毎号シリーズのように掲載されていることである。このタイトルの下に、人々の身近に起こった‘物理的’physikalisch、またはその他の変わった、珍しい現象についての話が集められ、それらが詳細に、また平明に解説されている。このタイトルには、リヒテンベルクの暦の特徴のひとつを知る鍵となる、2つの言葉が提示されている。つまり、‘physikalisch’と‘merkwürdig’である。

Grimm の Deutsches Wörterbuch の Physik の項には、*naturkunde, naturlehre: die wissenschaft von der nature heiszt physik. (Kant)*とある。実は、リヒテンベルク自身による Physik の定義が、ガーマウフが遺した、リヒテンベルクによる講義の記録[21]の中に次のように伝えられている。

> 「われわれが、健全な意識を持ってわれわれの向かおうとする方向に目を向けるとき、普段の生活の中で、『それはわれわれの外側にある』と言っているもろもろの対象物に気付く。これらの対象物をわれわれは物体と呼ぶのである。これらの対象物が作り成す総体が、物体世界、物質の世界、つまり自然である。ごく一般的な意味において物理学とは、科学の一分野であり、より正確に言うならば、物体の属性に関する知識の総体である。」

そして後方に次のように続けている。

「上記の物理学の定義に関連して言うならば、物理学は、半年の講義

---

21) 注７： Gamauf, p.5.参照。

で説明しうるような学問ではないのである。というのも、そこでは恐らく博物学や、化学、解剖学、そして生理学も伝えられなければならないであろうし、上記の一般的定義にこれらがすべて含まれるからである。」

上記の定義によれば、‘physikalisch’と認識される事柄には、現代のわれわれが知る‘物理（学）的’ばかりではなく、博物学、化学、解剖学、生理学の要素が含まれるのであり、『ゲッティンゲン懐中暦』においても、リヒテンベルクが、*Physikalische Merkwürdigkeiten* と題された記事の中で、さまざまな異質の分野の話を並列して取り上げていることが納得できる。例えば、1778 年版においては、デンキウナギ、火事から家を守る方法、磁気力、危険な毒虫、アンモンの角の発見、新式湿度計、フリントガラスの曇りの取り出し方、太陽の黒点、氷のように真っ白に見えた海、計算のための道具、船旅の改善、北極光、等などいくつもの異なった領域の話題がこのタイトルの下にまとめて載せられている。また、Merkwürdig に関しては、上記第 2 章の後半部で既に触れているが、‘珍しい、一風変わった、不思議な’という意味を含むこの語は、ドイツ（あるいはヨーロッパ）のこの類型の暦の後半部を構成する、物語の部の伝統的キーワードとなって、読者の好奇心をくすぐる暦の魅力となっていた。リヒテンベルクの『ゲッティンゲン懐中暦』は、既に述べたように従来の暦物語とはその特性を異にしているが、伝統的なこのキーワードは彼の暦にとっても必要不可欠であったのである。また、このころは、科学者や技術者はもとより、巷の科学愛好家によって盛んに、さまざまな道具が考案されたり、発明されたりしていた。ここには、測歩計・路程計 Weg-Messer,　物理学や数学のための計器類（電位計 Electrometer, 時計、湿度計 Hygrometer などのさまざまな計器）、あるいは避雷針の製作や使用についての話題が取り上げられている。　アメリカのフランクリンによって雷が電気現象であることが証明され、避雷針が発明されると、古来、人間の犯した罪を諫める神意の現われとして非常に恐れられてきた「落雷」を‘避ける’ということが可能となった。ドイツにおいては、ライマールス（Johann Albert Heinrich Reimarus, 1729-1814）がハンブルクにおいて初めて避雷針を製作し設置し

たが、人々はその効果について半信半疑であった。しかし、リヒテンベルクはこの仕組みに特に関心を持ち、その効果を確認するために自分の郊外の家（Gartenhaus）にゲッティンゲンで最初の避雷針を取り付けた。その様子をリヒテンベルクはライマールスに宛てた1794年8月18日付けの手紙の中で、図3のようなスケッチを添えて説明している[22)]。この家は、ゲッティンゲンの町のブラウヴェーク通りに現存し、この家を取り壊しから救った人物の子孫が今（2012年）も住んでいる。

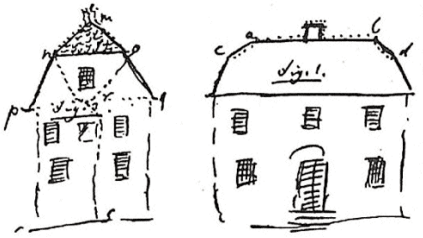

図３： Die Skizze des Blitzableiters am L.s Gartenhaus.(gezeichnet von Lichtenberg)

2）女性や子供も楽しめた記事—動物・その他の博物学的関心事

1749年、フランスのパリ王立植物園園長ビュフォンによる『博物誌』の最初の３巻が発行された。これらは非常な人気を博し1750年にはドイツ語版も出版され、ヨーロッパ中を席巻したといわれる。地球上の人間や生物を聖書の記述によらず、科学的に把握するための基盤として博物学が捉えられ、人々の博物学への関心が高まった。『ゲッティンゲン懐中暦』では、動物たちの生態についての‘merkwürdig’な話題がいくつも紹介されている。取り上げられている動物・昆虫・鳥などには、ジゲタイ[23)]、ミツバチ、蝶、シュナイダーフォーゲル、オランウータン、猫、カモ、蟻、カエル、ハゲワシ、ガチョウ、犬、ハエなど身近な、あるいは珍しいアジアや南洋の動物たちのエピソードや紹介文である。例として次のようなタイトルが見られる。（ドイツ語表記は原文どおり。括弧内の数字は『暦』の出版年と頁を示す。）

Würkung der Musik auf einige Thiere. (1778/82)
（何種かの動物に表れた音楽の効果。）

---

22) W. Promies: *Schriften und Briefe IV*, p.897 参照。
23) 注 19 を参照のこと。

Von Thieren als Wetter-Propheten. (1779/97)
（天気を予言する動物たち。）
Ueber die Tactik der Thiere. (1792/116)
（動物たちの戦術について。）
Wie weit manche Vögel zählen können. (1792/168 Miscellaneen)
（鳥は一般に、いくつまで数えられるか。）

当時、暦は、庶民にとって‘読む’ばかりでなく、‘朗読されるのを聴く’書物であったことから、これらの身近な生き物の話は、識字力のない人たち、女性や子供たちにも知識を深め楽しめる記事であったに違いない。

3.2.2 A.2. 小さな暦、広い視野：社会的事象に関する記事：

このグループの記事の数は、2 番目に多く、社会的事象に目を向けることもおろそかにされていない。

1）人権宣言の夜明け前：社会学的、経済学的知識（情報）・知見の提供。

このグループには、北米における英国人居住区の人口、英国と北米の貿易収支、奇妙な流行と風習、奴隷貿易、タバコ用パイプの製造法などについてのタイトルが見られる。ゲッティンゲンの町についての話題はほとんど見られず、むしろ広くヨーロッパの国々や北米に目が向けられている。しかし、アメリカ独立戦争（1775 〜 83）とフランス革命（1789）という大事件が、リヒテンベルクが『懐中暦』を編集している時期に勃発しているのだが、それらについての記事はほとんど見当たらない。その理由については、Knop の記述が参考になるであろう。それはおおよそ次のようである。

「暦は常に検閲をうけることになっていたが、実際にはその特権が保証されて、その必要はなかった。しかし、1789 年以降状況は一変した。Karlsruhe の *Historische Calender* 1791 年版の印刷は既に許可されていたにもかかわらず、検閲し直され、印刷業者によって返却を要求された。原因は、フランス革命についての報告だった。それを手に取ったフランスからの移住者が、それは一般の読者に適していないと言ったからだった。選帝侯の命令で、すべての暦から関連のページが抜き取られなければならなか

った。それ以来、現代史の記述は暦からすっかり姿を消すことはなかったが、著しく減少したのだった。[24)]」

『ゲッティンゲン懐中暦』にこの時代の政治的な記事が非常に少ないのは、上記の事情が一因であるのかもしれない。

一方、奴隷に関する、1782 年版の中で前後して掲載されている 2 つの記事（‘*Vom Neger Handel*.’ (1782/45)および ‘*Werth eines Stücks menschlichen Schwarz-Wildes zu verschiedenen Zeiten*.’ (1782/55)）は、奴隷貿易が当時、一般に疎まれながら、依然として益々盛んに行われていたことを、奴隷貿易についてのシュプレンゲル教授（Matthias Christian Sprengel, 1746-1803）の論文を引用しながら伝えている。ヨーロッパの国々は、彼らの新世界の植民地のために奴隷を必要としていた。一方、アフリカの国々は、火酒や馬や木綿生地と引き換えに家族や仲間を奴隷として売りわたした。「黒人の奴隷たちは、今でも（1782 年）アフリカで依然として、まず洗礼を受けさせられた後、肥育された豚のように焼き鏝で印を押されて連れ去られている。なぜこのような貿易が益々拡大し、政府はそれによってどんな利益を得ているのかという問いへの答えを、ここに引用している論文の中で、読者のみなさんはご自分で調べてみてください。」とリヒテンベルクは結び、読者の自立的思考を促している。奴隷制廃止の具体的な成果がイギリスやフランス、アメリカにおいて見られるようになるのは、19 世紀に入ってからのことであった。

2）ヨーロッパ以外の世界が視野に入ってくる。

ヨーロッパの啓蒙時代の特徴として、各国の植民地争奪戦争や博物学的関心の高まりから、一般の人々のヨーロッパ以外の国や土地、およびその博物への関心が高まっていたことが、『ゲッティンゲン懐中暦』の読み物部からも推察される。ほとんど毎号、さまざまな遠隔の土地や国の話題が取り上げられ、南国からの蒐集品の価格表などの記事もある。例えば、「インドにおける氷の製法」（1778/31）、「中国人の真珠製造法」（1778/70）、「ホッテントットの中にもいる完璧な人たち」（1791/125）、「アフリカの奥地からの報告」（1793/143）など扱われている地域の範囲も広い。中国の

---

24) Knopf, p.133/134 参照。

真珠製造に関しては、ベックマンも彼の前述の著書　『西洋事物起原Ⅱ』において、「人造真珠」の項目の中で言及している。しかし、年代的には、『ゲッティンゲン懐中暦』の中の記事のほうが古い。

カール・ペーター・トゥーンベリ[25]（Carl Peter Thunberg, 1743-1828）が、当時ロンドン王立協会（ロイヤル・ソサエティ）の会長を務めていたジョーゼフ・バンクス（Sir Joseph Banks, 1744-1820）に宛てた書簡[26]が当協会の論文集に掲載され、それからの引用である「最新日本情報」*Das Neueste von Japan*.は、1782 年号の『懐中文庫』の巻頭を飾った、15 ページにもわたる記事であった。トゥーンベリは、スウェーデンの植物学者、医師で、オランダ東インド会社の員外船医となって、1775 年（安永４）日本の長崎にやってきた。日本に 1 年滞在したが、その間蒐集して自国に持ち帰った植物標本を整理し、“*Flora Japonica*”（『日本植物誌』、1784）を著した。この書簡の中でトゥーンベリは、近代博物学の基礎を築いたリンネの弟子らしく、主に日本人の顔かたち、鼻や目の形、肌や髪の毛の色、そして男女それぞれの髪を結った髷（まげ）の形や衣類のことなどをこと細かに説明している。しかし、日本人の精神面についての記述は、殆どない。

3）ニュース性は期待できない年鑑型の暦

年鑑形式の暦という性質上、ニュース性のある記事は非常に少ない。次の 3 つの記事が見られるが、ニュースというよりは報告というべきかも知れない。

Nachricht von Capitain Cook's dritter Reise. (1778/90)

キャプテン・クックの 3 度目の大航海の報告。

Frankreichs Trauer über Maria Theresia. (1782/88)

マリア・テレジアの死を悼むフランス。

Die neuesten Nachrichten vom neuen Jerusalem. (1789/167)

新エルサレムからの最新情報。

---

25) ツンベルクとも。タイモン・スクリーチ著　村山和裕訳『阿蘭陀が通る』東京大学出版会　2011 年、p.123 参照。

26) (*Aus den Transactionen, Vol.LXX, Part I.*)とタイトルにあるが、出典の詳細は未確認である。（筆者）

4）女性の読者獲得への工夫：婦人・ファッション、および料理・家政・生活

『ゲッティンゲン懐中暦』の巻頭を飾った銅版画シリーズやこのグループに分類される記事によって、この暦が、女性の読者をも視野に入れていたこと、否、それどころか、女性の読者の獲得にかなり力を入れていたことが分かるのだが、実は、この暦の初版、つまり、リヒテンベルクの前任者エアクスレーベンの編集による1776年版の正に巻頭の1ページを割いて、発行人が次のように読者に約束している。

図4： Kopfputz von Berlin in GTC 1778.

> 「この暦の発行人は、この暦を女性の方々にも好まれるものとなるようにできうる限りの努力をし、いくつかの銅版画を挿入しました。これらには、最新流行の髪飾りやそのほか1775年のご婦人のモードを紹介しています。毎年この点を継続して行い、今年行われましたように、これからは更にこの面からご満足いただけるようになるでしょう。」（図4,5参照）

図5： Englischer Kopfputz in GTC 1778.

この初版が編集発行されるころ、リヒテンベルクはイギリスに滞在中であったが、恐らくディートリヒとの手紙のやり取りの中で、この暦の企画について知らされていたようで、ロンドンの町の中で見かける、暦の編集のために参考となるような情報をディートリヒに送っている。18世紀、身分の高い家の女性でさえ、読書は自由に許されていなかったが、世紀の後半にはこうして、庶民の女性にも啓蒙の光が浸透していき、それは暦の成功にもつながったのである。

5）暦の中の楽しい要素：逸話・奇談

このグループに分類された記事の数は、4 番目に多い。逸話や奇談の意外性は、確かに‘merkwürdig’（珍しい、奇妙な、不思議な、注目すべき）に通じるものがあり、読者が暦の読み物に期待した‘楽しい’要素であったに違いないから、その数の多さにも納得がいく。『ゲッティンゲン懐中暦』において、自然科学や社会学的・経済学的な教養的知識や情報が提供される一方、このような楽しい読み物がバランスよく配置されている。‘zum Nutzen und Vergnügen’という表現は、ホラチウスの *De arte poetica* の中の「文芸における二つの目的は、読者にとっての有用性と楽しみである。」という言葉[27]に由来しているが、当時好んで用いられたトポスであった。1778 年版の‘*Anekdoten*.’と題された記事の中の暗示的な一話を次に掲げてみよう。

> 「オランダの艦隊司令部に告知板があり、そこには、兵隊が（戦闘中に）失った体の部分に対する対価の規定が示されていた。すなわち、両眼： 1500 フロリン[28]、片目： 350 フロリン、両腕： 1500 フロリン、右片腕： 450 フロリン、左片腕： 350 フロリン、両手： 1200 フロリン、右手： 300 フロリン、左手： 200 フロリン、両足： 400 フロリン、片足： 350 フロリン。」

通達の内容は明白で、これを読んだ読者は、対価が支払われるのは当然のことと納得さえするかもしれない。リヒテンベルクはこれに特別コメントを付け加えていない。しかし、読んだ後で人は、ふと考えさせられるかもしれない、「人間の体が、まるで交換可能な機械の部品でもあるかのように扱われているではないか」と。諷刺家リヒテンベルクの同調する声が聞こえてくるようである。

---

27) Des Q. Horatius Flaccus SATIREN UND EPISTELN. Für den Schulgebrauch, p.346 参照。

28) 14–19 世紀に使われていたドイツおよび近隣諸国のグルデン金貨〈銀貨〉（独和大辞典参照）。

3.2.3. B1. 自立的思考を促す『懐中暦』の近代性：精神的分野（信仰・道徳）に関する記事

このグループには、リヒテンベルクの思想が提示されていると思われる記事や論説が含まれる。リヒテンベルクによる初版 1778 年版の読み物部の巻頭を飾ったのは、「観相学について」*Ueber Physio (g) nomik*（表記は原文通り）と題された 20 ページ余にもわたるかなり大分の、リヒテンベルク自身による論説であった。ここで彼は、当時のヨーロッパで一世を風靡していた‘観相学’を正面から見据え、常々感じていたことを吐露したのだった。リヒテベルクが暦の編集に着く少し前より、スイスの神学者ラーファター（Johann Kaspar Lavater, 1741-1801）が、『観相学断片』*Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe*[29] を発表し始め、それは若い詩人たちの間に熱狂的に迎えられていた。リヒテンベルクは、この重要な巻頭の記事に、彼がこれから携わろうとしている暦の編集に対する自らの基本的姿勢を打ち出したのだった。それは大衆に迎合しない、自立的な思考態度であった。外面は内面を表すとする観相学の考え方に対し、リヒテンベルクは、「体は心と周りの世界の中間に位置して、両方からの影響を反映する鏡であるから、体はわれわれの素質や能力を物語るばかりでなく、運命による打撃や、環境、病、暮らし向き、そして、受けた無数の災難を物語っているのだ。それらの災難にわれわれをさらすことになるのは、われわれ自身の邪悪な決断が原因であるとは限らず、しばしば偶然や義務に起因しているのである」。（Vgl. GTC 1778, S. 6）だから、外面は必ずしも内面を著してはいない、と反論した。リヒテンベルクの観相学批判の小論は、彼が想像だにしなかった大波紋を社会に投げかけた。そしてこれを期に、観相学の思考体系はやがて崩れ始めた、とジークフリート・フライ（Siegfried Frey）は 1778 年版の翻刻版のあとがきで述べている。

また、このグループに分類したその他の記事には、「いくつかのよくある誤り」（1779、S. 72）「よくある誤りを正す」（1785 S.207）など、旧弊を改める、という精神が見られる。ところで、‘öfterer’という言葉が副詞

---

29) 4 巻、1775 − 1778.。

として用いられる場合についての一文（1794, S.147 Miscellaneen 4））は、リヒテンベルクのすぐれた文章家としてしての一面であるとともに、彼の風刺的遊び心が覗いている。*‘öfterer’* は *‘öfter’* の比較形であるが、実は *‘öfter’* は *‘oft’* の比較形であるから、*‘öfter’* は既に十分に *oft* であることを考慮すべきだというのだ。因みに、*‘öfterer’* が形容詞として用いられる場合、例えば、*‘bey öfterer Wiederholung’* などの場合は、*‘oft’*（しばしば）よりも *‘öfter’*（よりしばしば）*wiederholen*（くりかえされる）場合、と言わんとしていることは、おのずから理解できるが、これは記憶にとどめるほどのことではない、などとユーモラスに結んでいる。いずれにしても、これらの記事の中に流れているのは、人々の自立的思考や判断をそれとなく促す、リヒテンベルクらしい啓蒙的精神であった。

3.2.4　B2. 創作の魅力：銅版画の解説と文芸

『暦』の中の月毎の暦日表と暦日表の間に一枚ずつ挿入されている 12 枚の銅版画は、この暦の初めの十数ページを飾る、上流社会の婦人のものと思しき髪型や髪飾り、ファッション（衣装）の非常に鮮明で美しい銅版画シリーズと同様、ドイツ当代切っての銅版画家ホドヴィエツキの、そしてリーペンハウゼンやシューベルトの手によるものであった。この 12 枚の銅版画シリーズにリヒテンベルクは『懐中文庫』の中で詳細な説明を施している。また、特に人気を博したのは、英国の銅版画家ホガースの銅版画の中の人物の顔の部分のみを、リーペンハウゼンが銅版画に再現したものに対してリヒテンベルクが行った詳細な解説であった。（図６参照）これらは、社会学的、心理学的要素を含む解説であった。また、これらの美しい銅版画は、リヒテンベルクがこの暦のために特別に用意した珠玉であったが、識字

図６： Hogarths Köpfe in GTC 1786.

力のない人たちも大いに楽しめるヴィジュアルな魅力となった。

『ゲッティンゲン懐中暦』の読み物部において、リヒンベルクによる文芸的作品の数は非常に少ないが、それぞれの記事は魅力的である。‘*Der Harz.*’（「ハルツ。」）（1780/102）や ‘*Das du auf dem Blocksberge wärest. Ein Traum wie viele Träume*’（「君がブロックスベルク[30]山の上にいた、ということ。多くの夢と同じような夢。」）（1799/150）は、共に随筆風で、科学者らしい透徹した観察眼をもって綴られている。特に「ハルツ」においては、美しい牧歌的風景が、目に浮かぶようである。ハインリヒ・ハイネ（Heinrich Heine, 1797-1856）の *“Die Harzreise”*（1826）が書かれる約半世紀前のことであった。また、‘*Rede der Ziffer 8 am jüngsten Tage des 1798ten Jahres im großen Rath der Ziffern gehalten*’（「数の総会において 1798 年の大晦日になされた８の演説。[31]」）は、擬人化された数字たちが、変転しつつある時について論じあう、数学者らしいリヒテンベルクのヴィッツを含んだ作品である。これらは、リヒテンベルクの生涯に、もう少しの時間的余裕が見い出されていたなら、恐らく多くのすぐれた随筆が生まれていたであろうということを想像させるような作品群である。

4. 結語

『ゲッティンゲン懐中暦』の後半を構成する読み物部『役立つ楽しい懐中文庫』において、実験物理学者であるリヒテンベルクの、精通している分野からの知識と科学的思考を読者に提供することは、彼の得意とするところであったが、彼の優れた観察力、分析力、表現力、そして彼特有のイロニーやヴィッツのセンスによって、この読み物部は、知的な庶民の読者にとって非常に魅力的なものとなり、一つの町の暦という枠を越えた、普

---

30) 民間伝説でブロッケン Brocken 山のこと。ドイツ、ニーダーザクセン州とザクセンアンハルト州との間にある Harz 山地の最高峰（1142 m）。霧の名所で、古くからドイツの民話に魔女の集合する山として登場する。ブロッケンは、「ブロッケンの妖怪」現象でも広く知られている。（ブリタニカ国際大百科事典参考。）

31) 池内紀訳による。

遍性を持つ暦文庫となった。そこには、伝統的な暦物語の教訓的・道徳的傾向はほとんど見られず、代わりに物理学、天文学、博物学など自然科学における最新の知識が庶民に分かりやすく提供された。これらの記事は、リヒテンベルクの編集による『ゲッティンゲン懐中暦』全巻の『懐中文庫』の部の記事全体の約 3 割を占めている。随所に、さまざまな論文からの引用が見られ、典拠が明示され、編集の手法は非常に科学的であった。英国、フランス、自国ドイツの科学アカデミーの論文集や雑誌からの引用が数々見られる。それは、今日、国際会議や専門誌に発表される、過去に出された論文について（時として、ある期間に区切って）まとめ解説した、‘review report’にも通じるものがある。唯、彼自身の専門の研究成果などについての記事や論説はほとんど見られず、彼自身は情報提供者に徹しているようである。そして、彼のレベルの高い情報を期待している、当時の読者の知的レベルの高さも注意に値する。

時代は後期啓蒙時代、正に中世を後にし、近代という新しい時代に移り行く、狭間の時期に発行された『ゲッティンゲン懐中暦』には、精神の面で他に先駆けている近代性と共に、主に形式において伝統的な前近代性を併せ持つ面も見られた。『懐中文庫』に掲載された有用性と娯楽に富んだ多彩な記事は、この時代のさまざまな面を万華鏡のごとく映し出している。それは、実験物理学者であるリヒテンベルクの物理学に対する思考に起因しているといえる。つまり、リヒテンベルクによれば‘Physik’とは、われわれの外側にある事物の属性についての知識の総体であり、その概念には、現代のわれわれが知る‘物理（学）’ばかりではなく、博物学、化学、解剖学、生理学等の要素がすべて含まれると認識されていたからである。*“Physikalische und andere Merkwürdigkeiten”*という表題の記事がほとんど毎号の『懐中文庫』に掲載されていたが、これはリヒテンベルクが読者に伝えたい、欠かせない中心的メッセージであった。そしてこれは、従来の伝統的な教訓や道徳を中心テーマとする、‘暦物語 Kalendergeschichten’とは性格を大きく異にした点である。

18 世紀末、科学技術は進歩の海にこぎ出でた。目まぐるしい新発見、新発明の情報や知識を載せた『暦』の発行を知的な読者は毎年待ちわびたに違いない。リヒテンベルクは、その期待に応えて、正に死の直前まで

22 年間編集を続けた。彼の編集した『ゲッティンゲン懐中暦』は、庶民の啓蒙に資した、一方娯楽の要素もふんだんに取り入れた、知的な情報誌であった。

（慶應義塾大学大学院後期博士課程在学中）

Ein Kaleidoskop zur Erfahrung des Alltags.

Der *Goettinger Taschen Calender* als aufklärerisches Informationsblatt, den G.Chr.Lichtenberg für das gemeine Volk herausgab.

TSUBOI, Yasuko

Georg Christoph Lichtenberg (1742-1799) war als Experimental-Physiker, Astronom, Aphoristiker, Herausgeber einer Kulturzeitschrift nebst Taschenkalender, als Satiriker und Rezensent von Schauspielern in der kleinen Universitätsstadt Göttingen der deutschen Spätaufklärung tätig. Der deutsche Historiker Karl Bosl erkannte die Grenzlinie zwischen Mittelalter und Neuzeit erst um 1750, während Reinhart Koselleck die Zeit um 1750 als 'Sattelzeit' bezeichnete — 'eine Zeit, in der die Welt Alteuropas zurückgelassen und die Schwelle zur Moderne überschritten wurde[1)]'. Diese ‚Sattelzeit' erlebte Lichtenberg, indem er die Gesellschaft seiner Zeit mit offenen Augen ansah. Der von ihm verfasste und herausgegebene *Goettinger Taschen Calender* (GTC) zeigt die gesellschaftlichen Verhältnisse sowie die Wünsche und Gedanken des gemeinen Volks in vielfacher Perspektivierung von interessanten Einzelheiten: gleichsam ein Kaleidoskop zur Erfahrung des Alltags dieser Epoche.

Auf die Bitte des Verlegers Johann Christian Dieterich übernahm Lichtenberg im Jahr 1777 die Aufgabe, den *Goettinger Taschen Calender* herauszugeben. Trotz seines Berufs als sehr beschäftigter Experimentalphysik-Professor setzte er diese Herausgeberschaft 22 Jahre lang bis zu seinem Tod 1799 ununterbrochen fort.

---

1) Vgl. Ulf Diremeier etal.: *Kleine dentsch Geschichte*, Philipp Reclam jun. Stuttgart, 2006, S. 219.

In dem erzählerischen Teil, nämlich dem "Taschenbuch zum Nutzen und Vergnügen", das den zweiten Teil des *Goettinger Taschen Kalenders* bildete, offerierte Lichtenberg als Experimentalphysiker den Lesern zumeist erfahrungswissenschaftliche Kenntnisse und neue Informationen in dem Feld, wo er zu Hause war. Durch seine vortreffliche Beobachtungskraft, sein Analysevermögen und seine sprachliche Ausdruckskraft, gewürzt mit charakteristischer Ironie und Witz, wurde dieser Taschenkalender, der zunächst für die gebildeten Leser einer Kleinstadt gedacht war, sehr reizvoll und in deutschen Landen universell ansprechend. Es ist ein charakteristisches Merkmal von GTC, dass in seinen Taschenbüchern belehrende oder moralische Tendenzen kaum vordergründig zu finden sind, die für den traditionellen Kalender gerade in seinen Kalendergeschichten üblich waren. Dafür lieferte Lichtenberg vor allem neueste und aktuelle Kenntnisse und Informationen aus den Bereichen der empirischen Naturwissenschaften, nämlich Experimental-Physik, Astronomie, Naturkunde u.a., welche leichtverständlich im Taschenbuch-Teil von GTC die Alltagserfahrungen der Leser ansprachen. Die Artikel von dieser Art nehmen etwa 30 Prozent aller Artikel in allen Taschenbüchern von GTC ein, die er zudem fast alle selbst schrieb. Dieser Befund wird durch das Klassifizieren der Artikel in der vorliegenden Arbeit nachgewiesen.

Hie und da findet man aber auch Anführungen aus verschiedenen Zeitschriften und Berichten, die von englischen, französischen, deutschen und anderen Akademien oder sonstigen Quellen stammen. Sie können von der Funktion her mit heutigen 'review reports' verglichen werden, die bei Konferenzen oder in Fachblättern veröffentlicht werden (wobei heute die übliche Fachsprache der Experten die Verbreitung wieder einschränkt). Es ist auch auffallend, dass nur wenige Aufsätze von Lichtenberg zu finden sind, die im engeren Sinn über seine eigene Arbeit berichten. Wahrscheinlich wollte der Herausgeber Lichtenberg sich auf die vermittelnde Aufgabe als Informationsanbieter konzentrieren. Es ist auch bemerkenswert, dass die Leser seines Kalenders ein hohes intellektuelles Niveau hatten, wie sie es auch von seinem Kalender erwarteten. Dieses anspruchsvolle

Niveau tat aber in gewissem Rahmen einer allgemeinen Verbreitung keinen Abbruch.

Im *Goettinger Taschen Calender* findet man überall den Geist von aufklärerischer Modernität. Gleichzeitig ist jedoch Lichtenbergs humaner Respekt vor dem „Alten" nicht zu übersehen, der einer Phase der Vor-Modernität im Übergang gerecht zu werden sucht. Die vielseitigen und vielfarbigen Artikel, die reich an 'Nutzen und Vergnügen' (Horaz: 'prodesse et delectare') waren, spiegeln die Mannigfaltigkeit der gesellschaftlichen Verhältnisse und Perspektiven des Zeitalters wie in einem Kaleidoskop. Dies hat seine Ursache in der Schreib- und Denkart Lichtenbergs als Experimental-Physiker. Artikel mit der Überschrift "Physikalische und andere Merkwürdigkeiten" erschienen in fast allen Ausgaben. Sie gehörten wohl zur unentbehrlichen Botschaft von Lichtenberg an die Leser. Der *Goettinger Taschen Calender* war ein aufklärerisches Informationsblatt nicht nur für die gebildeten Leser der Universitätsstadt Göttingen, sondern für das gemeine Volk deutscher Zunge.